

運動部活動指導者の欲望とは何か： 日本体育・スポーツ哲学会第40回大会ベストプレゼンテーション賞受賞報告

坂本拓弥*

What is the desire of coaches in extracurricular sport activities? : Report about “best presentation award in the 40th conference of Japan Society for the Philosophy of Sport and Physical Education”

SAKAMOTO Takuya *

受賞の概要

学 会 名：日本体育・スポーツ哲学会

賞の名前：ベストプレゼンテーション賞

発表演題：「コーチング回路」はなぜショートするの
か：スポーツ指導者の欲望に関する試論
発表場所：日本体育・スポーツ哲学会第40回大会
(山梨大学)

受賞日：2018年9月2日

1. はじめに

上記発表は、運動部活動をはじめとするわが国のスポーツ指導における問題を、〈行き過ぎた指導〉としてあえて包括的に捉えることによって、暴力や暴言等に共通する発生要因を明らかにしようとしたものである。その際、久保が提示した「コーチング回路」概念を手掛かりとし、その今日的意義と課題を検討するなかで、指導者の欲望の問題を浮かび上がらせることを試みた。本報告では、その概要と今後の議論の可能性を示していきたい。

2. 概要

久保が提示した「コーチング回路」は、「哲学」→「計画」→「組織化」→「経営」→「評価」→「哲学」→（以下繰り返し）というように、運動部活動における指導実践のプロセスを示した、1つの理念型である。この概念の特徴として、1つには「哲学」の段階が設定されていること、またもう1つには、指導プロセスを「回路」として捉えたことの、2点を挙げることができる。前者は、例えば一般的に普

及しているPDCAサイクルに対して、さらにメタレベルの「哲学」の必要性を指摘するものである。つまり、〈勝つこと〉を目指している運動部活動において、さらに遡って、〈そもそも何のために指導しているのか〉を指導者自身が問うことを求めるものである。また、後者については、指導にかかわって問題が発生した状態を適切に捉えることを可能としている。特に、「評価」の段階から「哲学」を飛び越えて直接「計画」にフィードバックされる状態を、久保は電子回路になぞらえて「ショート」と呼び、そこにおいては勝利追求のみを目指して指導が暴走することを指摘している。そして、「哲学」を失ったこの暴走こそが、〈行き過ぎた指導〉なのである。

では、なぜ指導は行き過ぎるのであろうか。久保はその原因を詳細には論じていない。また、従来の〈行き過ぎた指導〉についての多くの研究は、その原因を指導者と生徒との関係性に求めてきた。確かに、この関係性は運動部が成立するための条件である。しかし、そのような考察の枠組みには1つの限界がある。それは、運動部が他の多くの運動部とともに存在し、そして指導者もまた、他の多くの指導者とともに存在していることを、見逃しているという限界である。ここに、指導者の〈複数性〉という論点が浮かび上がってくる。

この指導者の〈複数性〉は、あまりに当たり前であるがゆえに、これまで自覚されることがなかったと言える。しかし、それは指導者同士の競争という、新しい視点をわれわれに与える。指導者は、自身が

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

プレーする代わりに、選手たちを〈勝たせること〉を競っている。つまり、そこには〈勝たせたい〉という欲望が存在しているのである。

本来、指導者は運動部活動において、生徒の様々な面からの成長のために指導を行っているはずである。それゆえ、スポーツはそのための手段として位置づき、そこにおける〈勝つこと〉もまた、あくまでも生徒の成長を促すための手段となる。しかし、〈複数性〉によって指導者間の競争が過度に強められると、指導者の〈勝たせたい〉という欲望は、いつの間にか〈勝ちたい〉に変貌を遂げる。この変貌は、指導者と生徒との関係性に大きな影響を与えることとなる。すなわち、指導者自身の〈勝ちたい〉欲望が強まるということは、本来〈勝たせたい〉対象であった生徒が、指導者の欲望を実現するための手段＝道具と化すことを意味する。さらに言えば、そこで指示通りにプレーできない生徒は、指導者の欲望の実現にとって、もはや障害物にすらなってしまう。だからこそ、本来〈勝たせたい〉対象であったはずの生徒に、暴力や暴言が向けられることになるのである。

3. 今後の議論の可能性

ただし、指導者自身が〈勝ちたい〉と欲望することは、本当に問題なのであるか。ここからは、次の問いが導かれるであろう。すなわち、どのような条件のもとであれば、指導者の〈勝ちたい〉という

欲望が許容されるのであろうか。おそらく、その条件の1つは、指導者と生徒との人間関係の在り方である。筆者がよく使う例を挙げれば、それは *under* と *with* の違いである。つまり、指導者のもとに (*under*) 生徒がいるのか、それとも、指導者とともに (*with*) 生徒がいるのか、という関係の違いである。わが国の運動部活動では、一体どちらが多く見られるだろうか。もし前者ならば、指導者の〈勝ちたい〉欲望は上記論文で論じたように、生徒を道具ないし障害物として捉えることになるであろう。そして、願わくは後者の場合、指導者の〈勝ちたい〉欲望は、生徒の〈勝ちたい〉欲望に寄り添うことができるように思われる。つまり、この〈勝ちたい〉と〈勝たせたい〉のはざまを注意深く探っていくことは、われわれが無自覚のうちにとっている人間関係の在り方そのものに再考を促すことになるのである。この点についての探究は、今後の課題としたい。

なお、より詳細な内容については、以下の拙稿を参照されたい。

・坂本拓弥 (2018) 運動部活動における指導者の欲望
論試論：「コーチング回路」概念の批判的検討を通して。体育・スポーツ哲学研究, 40(2), 105-117.

文 献

久保正秋 (1998) コーチング論序説：運動部活動における「指導」概念の研究。不昧堂、東京、106-127.